

火の魔法陣

上

斎藤



斎藤 栄

火の魔法陣

上



火の魔法陣 上

一九八〇年六月二五日 第一刷発行

定価 九八〇円

著者 斎藤 栄

装丁者 沢田 弘

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
郵便番号 一〇一

電話 出版部 二三〇一六三六一
販売部 二三八一二七八一

印刷所 共同印刷株式会社
検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたしません。

火の魔法陣
上
*
目
次

放 火 の 科 学	梯 子 の 欠 陥	ビ ル の 炎 上	京 都 の 夜 景	息 子 の 自 殺
158	126	82	44	7

炎上の実験	記者の直感	奥丹後の噂
276	239	195

カバーに使用した地図「横浜」は、建設省
国土地理院長の承認を得て、同院発行の五
万分の一の地形図を複製したものです。

承認番号 昭55総複、第440号

火の魔法陣
上

息子の自殺

1

電話がかかって来たのは、午後九時頃だった。湯川歌代子は正確な時刻を確かめたわけではない。電話の奥で、息子の正夫の暗い、絶望的な調子の声を聞いた途端、前後の脈絡がすっかり消し飛んでしまったのだ。

「母さん、おれ、もうダメだよ。死ぬ……死ぬしかないんだ……」

正夫の声は震え、感情の昂ぶりから、今にも泣き出すかと思えた。

「……正夫。何を言っているの？ 一体、どうしたんだい？」

〈死〉という言葉聞いて、歌代子は狼狽した。正夫は大学受験に失敗し、今年は三浪の身だった。一浪二浪の時は、随分、元気があったのに、この春頃から様子がおかしくなっていた。

「何もかもダメになっちゃまって……。おれってヘマなんだ。こんな人間、生きていたってしょうがないよ……」

「しっかりして、正夫。生きていなけりや人間じゃないんだよ。死ぬくらいなら、勉強する必要

はないもの。今夜はどうかしているねえ」

わざと叱りつけるように言ってみたが、遠く離れた息子を思うと、どうしようもない擬かしさが残った。

正夫は、集中して受験勉強するために、一浪の夏から、この静岡の家を離れ、現在、横浜市郊外の1DKマンションに一人で仮寓している。

「さようなら、母さん。おれはガス自殺の準備をしている。死ぬ前に、母さんの声だけは聞きたかった……」

正夫の昂ぶった声は、一方的に、そこで切れようとした。

歌代子は、本能的に、

へあ。これで電話を切らせたら、あの子は本当に死んでしまう。なんとか、喋りつづけて気持ちを変えさせなければ……」

と感じた。

夫の興平は、勤め先の明星商事から戻っていない。帰宅は午後十一時過ぎになるだろう。さりとて、静岡・横浜間は、新幹線でも一時間半はかかる。

「正夫。なんだか、よく分からないけどね。とにかく一度、母さんとゆっくり話し合ってみようよ。もし、打てる手があれば、なんでもやってみたいもの……」

「やるだけのことはしたんだ。でも、おれの力じゃ無理だって分かった。ダラシのない話さ。こんなダメな男……母さんも諦めてくれないか……」

「いいえ。とんでもない。母さんは絶対に諦めませんよ。おまえは充分に国立の一流校へはいれ

ます。自信を持ちなさい。きつと、今夜のおまえは疲れているのよ……」

「本当に……疲れたのは確かなんだ。もうゆっくり休みたいよ」

「そう。分かったわ。やっぱり疲れているのね。少しこちらへ帰っていらつしやい。八月には、きつと戻ってくれると思っていれば、この間、この夏もひと頑張りすると言うから……。でも、そんな風にひどく疲れを感じるようじゃ、本当に駄に毒よ。明日にも……いえ、今夜、すぐに新幹線で帰らないよ」

歌代子は必死だった。何はともあれ、息子の気持ちを、へ死から遠ざける必要があった。それには、次々に話題を提供して、こちらのペースに巻き込んでしまわねばならない。

へ……失敗だったわ。いつまでも、あの子を一人でマンションなんかにおくんじゃなかった……深い後悔の念が、歌代子の胸で渦巻いていた。

送受器を力いっぱい握りしめ、彼女は喋り続けた。

「もういいんだ……」受話器の奥で、力のない正夫の反応があった。「帰ったって、同じことの繰り返しさ。努力しろ、やってみろ……おやじはきつと百万遍も言うだけなんだ。その通りだと思ふよ。だけど、努力したってダメなものだ。おれにはそれが分かったんだ……」

「正夫。何も目標の大学じゃなくても……」

と言いかけて、それが息子をかえて刺戟するのを恐れた歌代子は、

「……ねえ、父さんは別にして、二人だけで、もう一度、将来のことを話し合ってみようよ。これからそっちへ行くから、早まったことをしないで、待っていておくれ」

と畳みかけた。

「母さん、ありがとう。でも、おれはおれの力を知っている。ダメなんだ、ダメなんだよ……」
最後は涙声で訴えかけていた。

普段なら、〈何を莫迦なこと言つて!〉と強く叱るところだが、今の状態はとて、それができ
る雰囲気ではなかった。

「ダメじゃないわ。おまえがダメなら、世間の人はみんなダメになると、母さんは思うの。悲観
し過ぎよ。いつだったか、ぼくは大型晩成タイプだって笑っていたのはどうしたの。四浪も五浪
もして、難関を突破した人だってあるのよ」

最悪の事態を想定しながらも、歌代子は夢中で論じた。要するに、正夫は〈自信〉を喪失して
しまったのだ。あるいは過労も加わっているかもしれない。それが発作的な〈死〉への道を選ば
せようとしているに違いなかった。

「……………」

低いかすれたような正夫の呟きが、わずかに歌代子の耳に届いたと思った次の瞬間、フツと人
の気配が遠のくのが分かった。

「正夫、正夫……」

歌代子は、気が狂ったように、送話器に向かって叫びかけたが、もうなんの反応もなかった。

正夫は、遂に電話に出るのをやめたのだ。それはとりも直さず、正夫がガス栓を開き、〈死〉へ
のダイビングを始めたことを意味する。

〈どうしよう……〉

歌代子の心臓は高鳴り、何をどうしたらいいのか分からないほど動揺した。いったん、送受器

を置き、震える指で、彼女はもう一度、ダイヤルしてみた。

しかし、もう正夫は出てくれなかった。

「正夫ったら……送受器を外しているんだわ」

死を決意した正夫が、外部からの電話を遮断するために、フックから外してしまった様子が、手にとるように感じられた。

電話というのは、接続コネクした後、送受器をフックにかけずにおくと、いつまでも「話中」の状態になっており、使用できないことになる。

それを知らない歌代子は、次に興平を呼び出そうと、一生懸命にダイヤルを廻し続けた。が、さっぱり役に立たなかった。

「困ったわ……。こうしているうちにも、あの子の生命が……」

頭の中は、何か熱いものが燃えるようであった。

視線が、応接間の模造マントルピースの上に置かれた長方形の時計に走った。九時十五分……。

「確か……まだ上りの新幹線は、一本や二本、あるはずだわ」

そう思った歌代子は、メモ用紙に、

——正夫が自殺すると電話してきました。これから横浜へ行ってきます。歌代子

と、乱れたボールペンの文字を書き残し、外出の用意もそこに、玄関から外の闇へ飛び出した。

風があるので、熱帯夜というほどではないが、それでもかなり蒸した夜である。歌代子は道路を二つ走りぬけた。すると、流しのタクシーがつかまえられる大通りに出る。

「正夫。死なないでね……」

内心では、それだけを、念仏のように繰り返しながら、力の限り、駆けた。

運よく、駅方向へ向かう空のタクシーが通りかかった。後で、冷静になって考えれば、どこかの公衆電話で一一〇番し、静岡県警に依頼して、神奈川県警にリレーを頼めば、もっと早く、正夫の住むヘグリーン・マンションをチェックできたのだ。

しかし、このときは、タクシーから新幹線へこだま号へと、比較的スムーズに乗り継いだのを、歌代子は単純に喜んでいた。

列車内からも、13号車の電話室へはいり、正夫の許へ接続しようと試みたが、これは失敗に終わった。

そこで、歌代子は、残業で会社にいるはずの興平を、列車内で呼び出した。

「……あなた？ 私よ。大変なことになりそうよ……」

歌代子は、上ずっている自分の声を、必死になって抑えた。

「どうしたんだ？ 泥棒でもはいつたのか？」

事情を知らない興平は、そんな風に言った。

「違いの。正夫が、もうダメだ、自殺するって電話をよこしたのよ……」

「なんだって！ とめたのか？」

「そうしたわ。だけど、死ぬと言ったきり、もういくら喋りかけても返事をしないの。それで仕方がないから、横浜へ行ってみてるつもり……。この電話はこだま号の中からよ」

「しょうのない奴だな。すぐに感情的になって……」

直接、電話を受けない興平は、それほど膚身にしてみていないのだ。

「口先だけならいいんですけど……。今夜はとでも様子がおかしいわ。本気でやろうとしているみたい……」

「莫迦を言え。死なれてたまるものか」

「そう言っても、あの子も切羽詰まっているのよ。ガス……ガス自殺するって……そんな具体的なことまで口にしていたわ」

「本当か！」

「グリーン・マンション」は、都市ガスを使っていない。プロパンの集中配管方式によるガス使用の型態をとっている。正夫は、そのプロパンガスで自殺を計画しているのだ。

「とにかく行ってみてきますわ。でも……万一のことがあったら、どうしましょう……」

「そんな……。絶対に生きている正夫を連れ帰ってこいよ」

「心配だわ。あなたがあんなマンションを買って与えたからいけないのよ……」

言っても仕方がないと分かりながら、つい愚痴が出てしまう。

「何を言うか。おまえだって、買うときには賛成したじゃないか。とにかく、この際、連れ帰ってくるんだ……」

興平は、同じことを繰り返した。そのうちに、百円玉を使いきったので、歌代子は夫との会話をそこで終えた。

静岡からは、三島、熱海、小田原の三つの駅を経て、新横浜に着く。

歌代子は、窓側の自由席に坐り、真っ暗な外の光景に目を向けていたが、その実、何も見ては

いなかった。彼女の頭の中では、今も耳許に呼びかけるわが子の言葉が反響していた。

——母さん、おれ、もうダメだよ。死ぬ……死ぬしかないんだ……

——母さん、ありがとう。でも、おれはおれの力を知っている。ダメなんだ、ダメなんだよ……。
へ正夫、生きているんだよ……

歌代子はそれを繰り返した。訳もなく、熱いしたりが彼女の双の頬を濡らした。こんな風に、親と子が引き裂かれていいものだろうか？ 歌代子は、苛立ちと絶望に責められながら、新幹線の動揺に身をゆだねていた。

2

新幹線が新横浜駅のホームにゆっくりすべり込んだ。気の焦った歌代子は、おり口のガラス越しに、苛立った思いで列車のとまるのを待ち続けた。

それにしても、新幹線の列車は、どうしてのろのろとホームに着かなければならないのだろう。歌代子は列車のドアを、手であけてしまいたかった。

へ正夫……。母さんはもう横浜に来ているんだからね。待っていて……。決して無茶な真似はしないで……

渦巻くばかりの言葉で、歌代子の頭はいっぱいだった。そして目先には、わが子がガスを吸い、悶え苦しんでいる姿が、しきりにちらつく。

二十歳にもなった子を、勉強ノイローゼのために失うことは、想像するだけで、足許の大地が